

1965

# 針葉樹会報

針葉樹会

復刊第12号



---

山行寸描－檜洞丸(中川孫一)	—	P.1
五月の北海道(大建二郎)	—	2
北海道山歩記－その1－(小野肇)	—	6
針葉翁樹会のこと(岩崎利一)	—	10
ヒマラヤ先遣隊報告会	—	11
通信欄	—	12
住所変更・勤務先変更	—	14

---



山行日記  
檜洞丸

中川孫一（大一五）

八月二九日

会社の青年婦人部が西丹沢（第次）でキャンプファ

ラウ。

イヤをやるというので八年振（三三年以降中絶）に参加した。序に、一行の大越路往復に同行し、大越路－桧洞丸－蛭－姫次と三。数年振に丹沢主脈を歩くプロシンを樹てた。西丹沢主稜は、すず竹のジマングルで有名だったが、三十年の国体で縦走路を開いたので蛭まで一日で歩けるようになつた。しかし、二、四、五年下刈をしていないので、すず竹地帯は、まるで泳いでゆくようになる。<sup>おこげ</sup>大笄の急坂二〇メートル（四〇°四五度）は、四つ足、？登りで、ザツシが重いとユタエる。（案内書には逆コースは苦しいとある）

桧洞丸の小屋（青砥山荘）は、水が不自由（東へ四十分降つて金山谷秉越へ源頭から汲上げる）だが、棚の原生林に囲まれた静かな良い泊場だ（収容五十人）、鹿が訪ねてくるという。

翌日、蛭－姫次に向う筈（蛭の急坂三〇〇メートル）はやはり四ツ足急登（）だったが、天気が崩れてきたので、弥太沢尾根ルート（大笄の鞍部から北に向い、神ノ川ヒュッテ－大越路の津久井側登り口）に降る新道－獵師径を、国体で、登山道に改修（）を降つた。

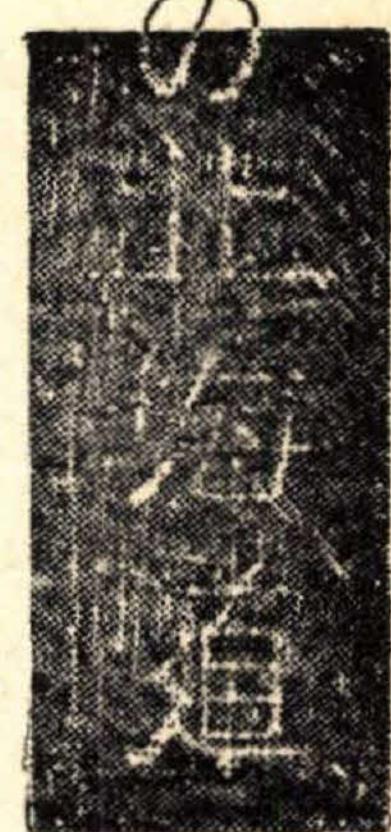
昨日の主稜ルートとは打って變つた（登路としても）快適な道である。津久井側へ道志渓谷の東野又は音久私（）から西丹沢中心部への最短、最良のルートである。

桧洞丸周辺の原生林のハサツつじは、天下一品と小屋の主人も、丹沢学内誌（）雲と山と（八月号）も推薦している。赤、白、紫とは珍らしい、花時に是非見たいものである。

夏の丹沢は殺風景である（高山植物は少しあるが）、春、秋を送るべきであろう。

小屋は示れる程ある。六。近い、大半が、東丹沢に集中している。日臨祭日には、お祭りのようになるのも無理はない。登りの転落事故の多いのも、この登山人口に關係がある！

# 五月



## 大建二郎（昭三七）

### 一、出發

四月二八日夜、特大のキスリングにスキーをかついで鉄鋼ビルの日本航空待合室へ行く。既に高橋は借りて来た猫のように端の方にはさつとすわっている。どうも山の格好がその場の雰囲気にそぐわない。金が無いのでわざわざ夜中に出るオーロラ号へ片道二〇〇円位安いを選んだのに、荷物が規定をオーバーして一人一六〇円もとられて、全く飛行機とは高いものだと思は知らされるへちなみに荷物は一五キログラムまで無料、一キログラム越えるごとに二〇円をとられる）。フザウハウ不平を云つていたが、バスが高速道路を羽田へ向うとすっかり気分が直り、ちょっとした遠征気分にひたる。飛行機で日高に行くのは日本ばかり、紅茶を飲んでウトウトしていると、もう千歳だ

だしぬどと気焰をあげながら羽田へ着く。

座席がプロペラのすぐそばで、ひどくやかましい。

さすがに北海道の五月は寒い。東京から三時間弱で北海道にいるという感覚が実感とならず、その寒さがからだになじまない。日本航空のバスで札幌市内の待合所に運ばれる道すがら、この調子では山は相当きついようだなと思う。待合所には、三月に山岳部を卒業し、北海道の山を登りたいと北海道電力へ就職した小野が迎えに来ているはずなのだが、いつこうに姿が見えてない。しばしあつて、寝過したと電話があり、タクシーで飛んで来る。いつたん彼の独身寮へ行き、ひとり息入れてから街へ買物に出る。北大へ行つて山岳部の部屋へ寄ると、折しも日高のトツタベツ川で雪崩に遭つて行方不明になつたパーティの対策を協議している所だつた。秀岳荘という運動具店を紹介してもらい、早々にあいさつして引下る。

夜、七時半の準急で旭川へ行き、小野の友人の家へしといえどもあまりいなぞ。これぞバイオニア精神

つた。

### 二、富良野岳

さすがに北海道の五月は寒い。東京から三時間弱で北海道にいるという感覚が実感とならず、その寒さがからだになじまない。日本航空のバスで札幌市内の待合所に運ばれる道すがら、この調子では山は相当きついようだなと思う。待合所には、三月に山岳部を卒業し、北海道の山を登りたいと北海道電力へ就職した小野が迎えに来ているはずなのだが、いつこうに姿が見えない。しばしあつて、寝過したと電話があり、タクシーで飛んで来る。いつたん彼の独身寮へ行き、ひとり息入れてから街へ買物に出る。北大へ行つて山岳部の部屋へ寄ると、折しも日高のトツタベツ川で雪崩に遭つて行方不明になつたパーティの対策を協議している所だつた。秀岳荘という運動具店を紹介してもらい、早々にあいさつして引下る。

翌三〇日、旭川から上富良野へ出て、そこからひとブで富良野岳の懷深く入り、十勝岳山荘へ行く。有名な富良野の自衛隊演習場のそばを通つて山道にかかる頃から雪が表われ、次第に厚い層となり、やがて二メ

一トル以上の壁となつて車道をさえぎり、道は雪の中  
に没している。そこから先はどうやってもブルドーザー

キーをかついで山荘までの道を登る。三十分ほど行く  
と、小高い丘の上に山荘が現われた。あいにくガスが  
まいて、あまり見通しは利かないが、富良野岳、上ホ  
ロカメトツクから十勝岳への稜線がちらちらと顔を出  
す。ひと休みして、すぐ富良野岳へ向かう。雪は堅く  
しまつていてラツセルはほとんどない。せっかくつけ  
たシールも、すぐはずし、スキーを肩にかづく。富良  
野岳の中腹を横切ってコルに出てスキーをデボし、ア  
イゼンにはきかえる。食糧不足で腹が減ることおびた  
だしく、一向に足が進まない。高橋が元気に先頭を切  
つて行く後を、小野と小生がしごかれた新人よろしく  
とびからし、いささか心細くなつた所で頂上だった。

頂上からながめる十勝側は、広々とした大雪原が続  
き、何かシベリアの荒野を思わせ、荒涼とした風景だ  
った。帰りはスキーでひとすべり。小野のスキーがま  
た妙なスキーで、大事な所でストツクを流したり、ヤ  
レヤレと思うとスキー片方流れたりで、ひろいに行  
くのに大騒ぎである。それでも何とか無事山荘までた  
どりつく。往復に四時間半はかかる。温泉に入り、

ビールを飲んで、又ひとくさり、北海道登山論をたた  
かわせる。

### 三、上ホロカメトツク山

翌朝七・三〇山荘発、今日は上ホロカメトツク山と  
いう十勝岳と富良野岳との中間の山へ登る予定だ。そ  
もそも十勝連峰は中央高地という北海道の背骨の一部  
で、大雪山系、石狩山系、十勝山系という三つの大き  
な山群が恩別岳あたりを中心にして三方に派生へ?して  
いるうちの一つであり、富良野岳はその一番端にある。  
全く視界が利かないガスの中を、噴火口の激しい噴  
射音を頬りに登る。左側が切れて火口地帯に落ちん  
ており、雪庇を踏み抜けばひとまりもない、途中、  
スキーをデボし、迷わぬようには跡跡を大きくつけながら  
登つて行くと二時間ほどで稜線に出て、そこからワ  
ンピツチで頂上だった。一人として見えず、厳しい  
冬の表情をした三角錐にはエビのシッポが発達してい  
た。急いで山を降り、下山の支度をする。ジープの來  
る所まで、キスリングを背負つて滑るのだが、えらく  
急で、小野はとうとうスキーをデボして荷物をかつい  
でいったん下り、又登つてスキーですべつてくるとい  
う御苦労な話となる。滑れる所まで滑つて行こうと、  
荷物をジープに乗せて、空身で滑り出したが、小生の

セーフティがすぐ故障してダウン、高橋だけ気持良さそうにどんどんすべり、ニキロメートルも下で待つていた。この辺はもう少し時期が早ければ、実に長い距離を渉ることが出来るようだ。そのまま汽車に乗り込み、山部の駅まで行き、さらに車をチャーターして、芦別岳登山口の鐘峰小屋まで行く。

#### 四、芦別岳

連休のせいか、早朝からいろいろなパーティが小倉へ来ては出て行く。そんな音を耳にしながらのんびりと起き、五、四五一番ビリで出発。すぐ雪が現われたが、急な坂でスキーを使うのはちょっと無理のようだ。頂上の近くで一度大きな池に出る。もちろん雪原にはついているが、そこから見ると芦別岳は対面の雪の大剣面の上にちよんと首を出し、おもしろい眺めだ。斜面を登ると、狭い屋根が繋いでおり、それを伝って本峰にとりつき、難なく頂上へ。取付いてから四時間一五分、途中、ほんどのパーティを抜き、頂上は一番乗冷たく、一〇分も居ないで下山のシリセード、グリベルの連続で一二・三〇、小屋帰着。次の目標の芽室岳へ向かうこととしてすぐ撤収し、山部の駅までトホトボと歩く、小野は会社の休みがあまり取れないと

別れて札幌へ帰り、高橋と僕は狩勝峠を越えて帶広の三つほど手前の御影の駅へ行く。雪融け水の間にフキのトウモロコシや水芭蕉が点々と散らばる狩勝峠は、シンカンと静まりかえつて印象的だった。その夜は御影の駅前を一〇〇メートルほど出た小さな旅館に止まる。あまり客もいらっしゃらず、客扱いもぞんざいでわびしい一夜だった。

#### 五、芽室岳

五月三日は快晴で明けた。四・五五出発。頼んでおいたタクシーを飛ばす。雪だけ道が悪く、車の終点から取付くまで一時間半ほど歩く。芽室岳は日高山脈の最北端に位置しており、駅の辺からながめると、隣のパンケヌシ岳が真白なピラミッド形の端整な姿をみせ、實に美しい。道は雪ではつきりしないので造林の飯場の人々に教わったまま、適当な所を尾根にとりつき、えつさえつさと登つて行くと、かすかに残るラッセルの跡をみつけ、それを忠実にたどる。雪がしまつてるので時々ズシリともぐるだけで歩きやすい。ハ合目位まで行くと、上から一パーティ降りて来る。トツタベルの方から縱走して來たらいいでたちである。時々響くエンジンの音を聞きながら、ペースを早め、稜線に九・三〇着。稜線に出たとたん、眼前に日高山脈

の延々とした連りが一時に聞け、思わず乗積らしいな

あの声が出る。まだ雪を深々といただいて、すぐ近く

にチロロ缶、真正面にトツ

タベツ缶、幌尻缶、札内缶、そしてはるかにカムイ工

クウチカウシヤエサオマントツタベツ缶が重置として

並んでいる。三年ほど前に初めて日高に入った時の恩

い出が一時によみがえる。あの時は南さん（三二年）

石さん（三六年）遠藤（三七年）と四人で夏の終りを

新潟川から日高へ入った。その時、もう二度と来ない

と思つた日高へ、再びやつて來た。そんな感傷がやたら

らと広がつて思わずヤホー、ヒトツと声をかける。

下から美しく見えたパンケヌシ缶に向い、一〇・〇・〇

頂上。再びとつて返し、芽室缶頂上は一〇・三〇だつ

た。芽室缶からさらに剣山という低い岩山へ尾根が続

いており、時間があれば行つてみようと話していたが、

意外に遠い様なのでやめて往路を下る。一時間半で飯

場へ下り、ちよどトラックが馬や家具道具をのせて

出る所だったので、山とつまれた道具の上に乗せても

らう。目の前に馬ヶツがあり、時々ボタボタと風を

するので、そのたびにあわててころげ落ちそうになる。

車は途中で別れ、あとは国道を今下つて来た美しい

山並をながめながら歩くのだが、何ともいえず良い気

分だった。そのまま旅館を出て帯広へ行き、少し立派

な駅前旅館に泊まる。

六、ニセコアンヌアリ

翌朝六・四〇・

次の目標

で来たの

コアン

山行

スアリ

計画のヤマを

終え、あと

は温泉で

スキーか

と思わ

ば思わ

さで一杯になる。

札幌一〇・五〇・大塚先輩の所へ挨拶に行こうかと

思つたがうす汚い格好なので遠慮し、再び汽車で北羅

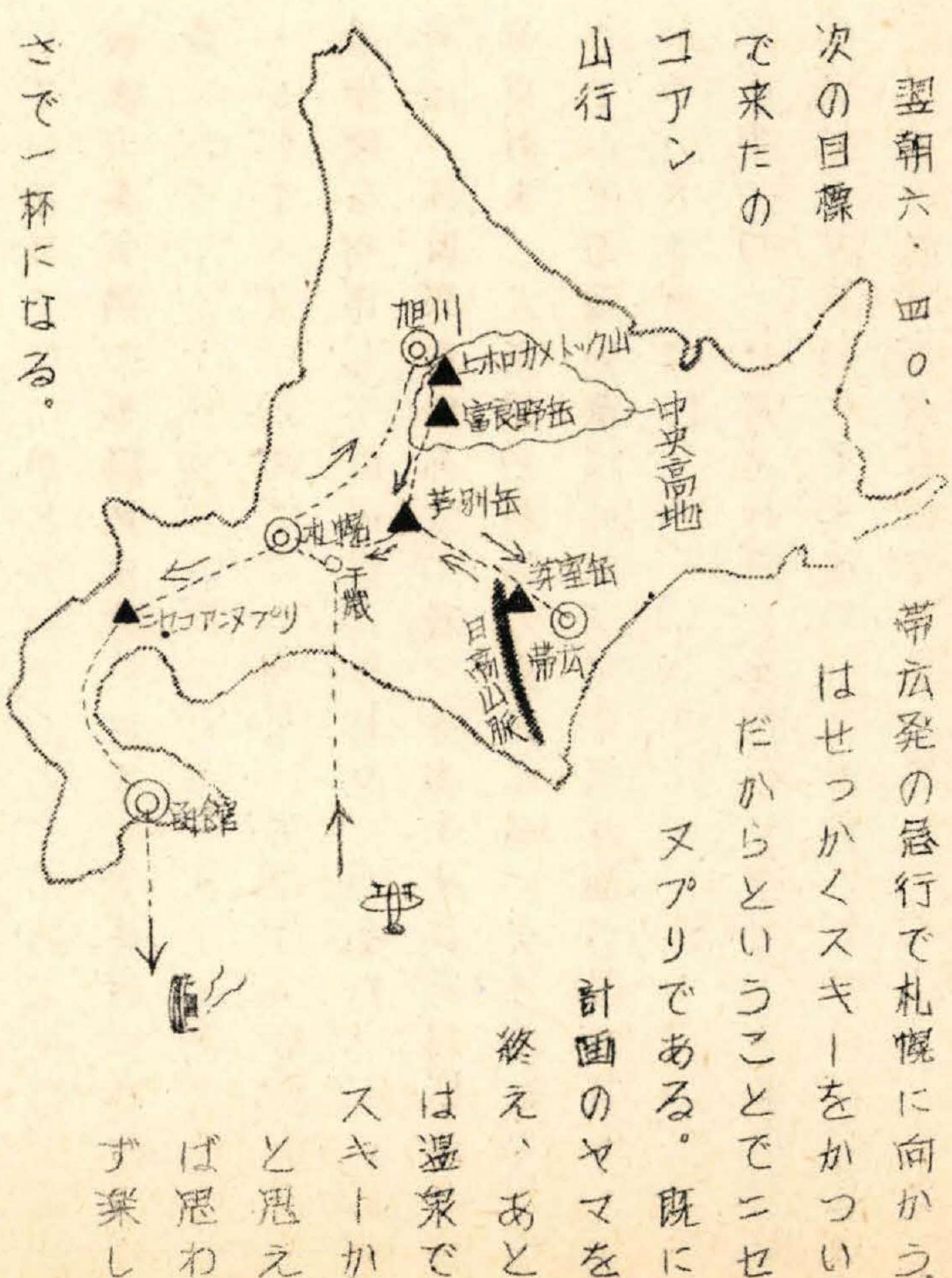
夫へ、駅から山田温泉のジープで旅館へ行く。三・〇

〇について、すぐ前のリフトでひとすべり。小雨が降

つており、雪は完全にグラメとなつて全然滑らない。

しかもまわりで滑っている連中は皆、とてつもなくう

まい連中ばかり。いさかがっかりして早々に引上げ



翌日、ガスで全然視界の利かない中を標識を頼りにニセコアンヌプリに登る。スキーカーをかついで、他人様の後をついて行く。途中から木が全然なくなつて、広々とした大斜面となり、とばとばと登つて行くと一時間半ほどで頂上に着く。気象観測用の小屋があり、国鉄山の家の方から登つて来た人達が何人か、たむろしている。下りは雪が悪くて思うように曲らず、せっかくの大斜面をキツクターンでまわるという情けなさ。そのためか、ニセコニセコと騒ぐほどたいした所ではないなど評価を下げる。三十分もたたずに旅館へもどつた。このあと、羊蹄山へ登る予定だったが、天気も悪く、いささか、このラツシユ山行にうんざりしたこともあって、函館へ出ることにする。再びジープで駅へ送つてもらい、函館にその日の夜着き、懐しの故郷の土をふんだ。函館で二日ほど遊び、最後のおまけに函館山に登つて九日、東京へもどる。期間一日、費用一人、二万五一六千円のいそがしい山行だった。

へ今回は最初の計画ではペテガリ岳西尾根をラツシユで登るつもりだったが、異常に雪の多い年で、北大の遭難など相次ぎ、日高中心部一帯は入山禁止とされていた。ペテガリの西側は自動車道が奥まで入つて非常に入りやすくなつてるので、又ぜひ計画したいと思つてゐる。・

つた。このあと、羊蹄山へ登る予定だったが、天気も悪く、いささか、このラツシユ山行にうんざりしたこともあつて、函館へ出ることにする。再びジープで駅へ送つてもらい、函館にその日の夜着き、懐しの故郷の土をふんだ。函館で二日ほど遊び、最後のおまけに函館山に登つて九日、東京へもどる。期間一〇日、費用一人、二万五一六千円のいそがしい山行だった。

感した。

そして入社した時に、一ヶ月に一回位会社のあらゆる施設を利用して山に行こうと心にきめた。しかし四月は、社員教育にあけくれ、そのチャンスがながつた。四月の末、大先輩と高橋先輩が札幌にのりこんできただので小生も両先輩にかわつて十勝方面の山にスキーをかついででかけた。

以後六月、七月、八月と乏しいサラリーや数少ない休暇をくみあわせて未知の山の探査にでかけた。以下は、その簡単な内容紹介である。

海道上記

小野そ  
肇(昭日)一

■富良野岳、上木口カメトツク山口  
四月二九日午前一時、羽田発のオーロラは、一気に

大、高橋函先輩を千歳空港に連んだ。食料その他を買へ、込んでその夜十勝方面に行くことにした。

札幌からでは、汽車の接続が悪いため、とにかく旭川までいき、今年入社したM君宅に御厄介となる。

四月三〇日 晴

旭川→上富良野→十勝温泉→富良野岳→十勝温泉

上富良野からは予約してあつた温泉の車で疊煙あがる十勝岳のふもとまで行く。残雪いまだ多く、自衛隊

のブルトーザーで除雪してあるところはまだよかつたが、それ以後は、雪の上を滑りながらススむ。これ以上は、無理という所で我々はおろされ、アゴをだしながら一小時歩いて温泉にたどりつく。一休みしてからスキーリードをつけて一九二ニメートルの富良野岳をめざす。稜線近くまで一気に登りそれからトラバースして登頂。帰途、右足筋重の一キロメートル以上の長い斜滑降でいさかうんざり、雄大な山スキーであつた。

五月一日 曇

十勝温泉→上ホロカメトツク山→十勝温泉→上富良

野→山部→芦別登山口陸路小屋

ガスがかかっていたが十勝岳をめざしてスキーにシールをつけて出発。シールがなくてもボコボコ歩けるほどの雪の固さだ。途中でスキーをデホし暖火口の奇

妙な音を左にききながら進む。稜線にたどりついてから向きを北東にかえユルに下り少し登った所が上ホロカメトツク山だ。これ以上は、無理と判断し足跡の見えない内に下山した。スキーのデホ地点からは、自由自在に入キーをのりこなしへ？して温泉にもどり、一風呂あびて下山。次の目的地芦別岳の登山口までかかる。

五月二日 晴

小屋→芦別頂上→小屋→山部→札幌

山部村は、空知川のほとりの狭い村で道路が札幌や旭川のように東西南北正方形に区切られたきれいな所である。芦別岳の登山口は、駆から一寸下った所から約四キロメートル一直線の道を歩いた所にある。山は、残雪が多く、一三〇〇メートル位の所までスキーをあげて山スキーを楽しんでいる人達も多かった。そんな連中を横目でらみながら一步一歩進む。頂上直下でアイゼンをはき登頂。頂上からの景観申分なし。頂上で一休みして一気に下山。小生は帰札した。

ロウペペサンケロ

札幌家の休暇を利用して糠平湖の奥のウペペサンケロへ一ハ六〇メートル→という山に今年入社したY君、H君と登った。雪が多いことやクマができるなど行

く前におどかされたが、さして雪は多くなく、クマにも  
もあわなかつた。

六月一二日 晴

札幌—帶広—黒石平—電発糖平寮

六月一三日 晴

電発糖平寮—糖平湖—ウペペサンケー—糖平湖—電発

糖平寮

ウペペサンケーは大雪にある山である。そのなだらかは頂上は、ニペソツの急峻な山容と対照的だ。遠くからみると両端がふくらんだ乳房のような感じである。ウペペサンケーの名の由来もそこからきたとか。

電発の発電所建設によつて一躍観光地化された糖平温泉

泉街から糖平川を五キロメートルほどさかのぼると道

は沢から離れる。ウペペサンケーの稜線から東にのびて

いる屋根にとりつき一時間半位登ると稜線に出る。そ

こが東端の一六〇メートル峰である。そこから西へ

長い屋根をたどる内に西端の最高峰ウペペサンケー頂上

につく。やわらかな初夏の陽をあびて下山。電発の寮

バーへ木ステスは、その寮のお手伝いさんである。）で痛飲す。

六月一四日 曇

寮—糖平湖—然別湖—北電然別寮

六月一五日 晴

寮—白雲岳—寮—帶広—札幌

然別湖は、帶広より北方約六五キロメートルの所にひつそりと水をたたえた火山湖で訪れる人の少ない北海道の神龍性を代表する景観地である。人造湖糖平湖から然別湖へ抜けたバス道路が来年中に完成するとか。北電の湖畔の寮で一泊し、近くの一〇〇メートルほどある展望山に登る。紺碧の湖、青々とした斜葉樹、緑色の広々とした十勝平野、残雪をいだいた日高の山々、印象的な一日をすごし帰札する。

口暑寒別岳口

七月三一日 曇後晴

札幌—雨童—国領村—雨童小屋

暑寒別岳とその周辺についてもの原本にこう書いてある。「北海道の西海岸一帯は、かつてニシンの大漁で栄えたが、ニシンにそっぽを向かれてしまつてからほかなりさびれている。北海道の中央部から北部へかけての日本海岸には、厚田、浜益、増毛、留萌、苦前羽幌などという街があるが、一般に交通の便に恵まれず、俗に陸の孤島といわれているところもある。これらの海岸に君臨するかのように、どっしりとした暑寒別の山塊があり、その山裾は、荒波に削られて絶壁の

つづく堆冬海岸となり、また東側の中腹には北海道の尾瀬ヶ原といわれる雨竜沼湿原がある。七月から八月にかけての北海道は、ものすごい観光ラッシュである。私の会社は、札幌のマイシステム、大通公園の東端にあるため、出社退社するときはもちろん、時間中窓からながめると小さなりュックをしようつた女性、大きなキスリングを背負った連中などがござるごめいでいる。彼らの大部分は、いわゆる北海道の観光地や大雪山、知床をめざしている。

私達は、せっかく北海道にはみつきにしたのだからそういう大雪、知床は、彼ら道外者にゆずり、一日休暇をとつてまだまだ開けていない暑寒別岳にでかけた。石狩の泥炭地を北上した札沼線は、約一〇〇キロメートルほどいって雨竜という小さな駅で我々三人だけをおろした。新装なつた町役場で入林許可証をもらい行けるところまでタクシーでいくことにした。

しかし途中から猛烈な雨にあり、道路は、川となり国領という雨竜から二〇キロメートルの地点でタクシーからおりた。そして雨の降る中を約二時間ばかり歩いて小屋に一泊を求めた。

八月一日 雨後曇

小屋一雨竜沼

翌日も雨、とにかく行けるところまでということでお

でかける。つるつるすべる急な道を端登するほどに裸界はひらけ、雨竜沼に出る。あつと思うほどにひらけたこの湿原は、東西四キロメートル南北ニキロメートル、池塘が無数にある別天地である。雨も降りやまぬため湿原をわたりきつた所でテントをはり、終日傘をさして逍遙する。

八月二日 雨後曇

朝方降つていた雨もあがつたのでなかばあきらめていた暑寒別岳を登頂することにした。しかし帰路は、バス停までの長い道のりを歩かねばならないことから考えて暑寒別岳の手前南暑寒別岳までとした。

次第に天気がよくなり南暑寒別の頂上からは、日本海がほのかに望め残雪の多い暑寒別にはこりをおしんで下山、走るようにして下り、やつと最終バスにまわる。あう。

芦別岳

八月二八日の最終列車で離札した。今度のパーティは、札幌支店の山岳部の若い連中五人である。今月は、東京へ帰つたりして経済的にも時間的にも苦しいのでみんなの希望する芦別につれていくことにした。

八月二九日 快晴

山部駅一登山口一羊蹄山一雲峰山一芦別岳一登山口、

雪のない戸外は、さほど威圧感を感じさせない。この日は、北海道では珍らしくほど暑く、汗びつしよりの登行であった。相変わらず芳別からの眺望は、申分ない。柱懸での生ビールがなんともいえなかつた。

来春のO.B合宿は穂高で実施します。

「目的」

カラユルム遠征に備えて

① チームワトル養成。最終キャンアからアタックにてるつもりで、二人単位で機動的に動く。

② ハロ。リで、<sup>→</sup>告ぐ。う。山本健一郎

〔隊長〕

〔隊員〕 O.Bに会おう。長い距離をこなす。

〔隊員〕 年月は上高地

〔B.C〕 若正

「期日」三〇日又は三一日から都合のつく時まで参加。新宿西口から帰郷バスで出発。

必ず座れる！

「ルート」奥又、明神、西穂、霞沢等

但し酒を呑みながら雪の穂高を拝むというルートもあり。

〔連絡先〕 小島和人

倉知敬（昭40）

## 針葉翁樹会のこと

岩崎利一（昭一五）

針葉翁会も会員が増えたのは結構だが、自己紹介で終つてしまふ様になつたので、その面倒のない古い連中で時々何となく集つて見ようという趣旨から、確か松木さんと望月さんの御世話で、三九年九月四日にやつたのが最初の会である。そのとき中川さんが、会の名稱を針葉翁翁会或はO・G会としてはどうかといわれ、その後大樹会と転じ、更に今度は翁樹会と変つた。恐らくこの針葉翁樹会に落着くことになるだろう。第二回は小生が幹事役で四十年一月二七日、第三回は日江井君が御世話役で五月一七日に開かれた。今刀ところ昭和一七年卒業以前の人達が集まつて居る。毎回一〇数名の出席で、窓いだ雰囲気を楽しんで来た。特にこれと言つた議事や相談というもののない自由な詠し合いが出来る集りは、近頃特に少くなつて來た様だ。この意味で、翁樹会は大切に続けて行きたいものだと思ふ。

# リ よ だ 会 樹 葉 針

ヒマラヤ先遣隊 報告会

40-10-19 館会水加

## 報告会次第

代 表 幹 事  
会 長  
佐 藤 隊 員  
丸 子 隊 長  
甘 利 隊

一、挨拶  
一、隊員紹介  
一、先遣隊報告

中川孫一 村尾金二 黒田正治  
渡辺九郎 桧木謙三 五十嵐数馬

望月達夫 岩崎利一 久保春一郎

根本 大 中村正司 高崎治郎

甘利仁郎 中村 保 中村幸正

市川陽一 沢木一天 丸子博之

小林正直 中島 寛 中川滋夫

倉知 敏 商橋信成 蝶川隆夫

小島和人 以上会員 石田信隆

佐藤之敏 原 博貞 以上学生  
地藤正巳

パキスタンでの外交接觸、アフガニスタンでの  
ミルサミナル峰登頂等について報告があつた。向  
うのお国振り、ヒマラバーン中のエピソード、珍ら  
しい風俗習慣等をまじえた興味深い話に一同耳を  
傾けた。最後に美しいカラースライドが映写され  
たが、時間が制限されていて一部だけしか見られ  
なかつたのは残念であった。

先遣隊は、パキスタン、アフガニスタンでそれ  
ぞ立派な成果をあげ、来年の遠征隊のためにも  
かねりはつきりした見通しをつけて帰国したにも  
拘らず、印パ紛争という事態によつて延期のやむ  
なきに至つたことは残念である。今迄の努力がた  
ち消えになることなくねばりづよく續けられてい  
くことが望まれる。

通 信 欄

ヒマラヤ先遣隊報告会の通知状より

△岩崎利一（昭一五）

上の娘を嫁がせるので、名残りの家族旅行に塩原の奥をハイキングしてきました。九月の初めとて、山路には誰も居ず實に静かでした。

△中川孫一（大一五）

八月末会社の西丹沢キヤンニアに同行したので犬越路から松洞へ歩いた。下刈不十分でスズ竹が少々うるさかったが西丹沢は今でも閑静なルートだ。三十年の国体で登山道が開発され昔のヤブ濁ざがなくなつた。春に松洞のハダツツジを見物したい。

△黒田正治（昭一一）  
トウチヨン四ヶ月、大分馴れました。

△柿原謙一（昭一二）

八月下旬雲取山に登り原生林の道で村尾さんに出合いました。

登山道出合ひし友と手を握る

△望月達夫（昭一三）

八月は妙高、火打山を歩き（一人）、九月は村尾さんらと秋の小川山を南から北へ越えました。

△春日井実（昭三二）

一九日先約がありますので、諸先輩、後輩、オー

△横山綱一（昭二六）

八月末より茅ヶ崎に移り、日曜日は海岸を歩いています。

△石和田四郎（昭三一）

元気です。本日も是非出席致したいと考えておりますが、庄重した業務処理のため欠席せざるをえない次第です。報告は別の機会にきかせていただくこととしましょう。諸兄によろしく。

△松尾憲二（昭三一）

山は見ゆれど登る機会なく、新潟美人は居れども懶ろになる機会なし。美酒あれども下戸にはさら用なく、何の懶に生きているのかと考える事もない毎日也。

ショーン会の皆様に宜しくお伝え下さい。月見の宴には是非訪部したいと思つてます。

△勝田有恒（昭三二）

とりわけ山行として報告するものがないのが残念です。目下来年のドイツ留学の準備中です。

△沢木一夫（昭三四）

又山に行つております。（軽いハイキングですが、

△倉知敬（昭三七）

学会で関西へ出張のため、残念ながら欠席。

△石弘光（昭三六）

△大橋喜治（昭三四）  
毎日旺日、鉢巻の山を丁AC東海支部の連中と歩いています。O・Bの冬山合宿どうなりますか。

一轟下さい、それから先遣隊について在名のナジ

ゴラ君、塙田兄、東海支部の連中に世話をなつています。先日、甘利兄来名の際話しましたが挨拶お願いします。

△多田伸治（昭三八）

元気です。雄井の結婚式に行ってまいりました。

十月十五～十七日に谷川一一倉出合にテンパル予定です。

△小林正直（昭三六）

先日、夜行で谷川の西黒尾根～茂倉～蓬峰と秋の一日を歩いて来ました。この次の懇親山行には是非参加したいものです。

△大賀二郎（昭三六）

十月の一、二両日、ハケ岳の中心部～中山峠～夏沢峠～赤岳～中岳～行者小屋～を縦走してきました。入部最初の山行で行つて以来、八年ぶりでした。

今度は木曽の御岳と舊ヶ岳へ足を向けました。

新轉商から橋への登路は人も少なくお花畠も僅在。白出次を覗いてしばし感傷にふけりました。

△竹中 彰（昭三九）

晴れた日には薬師から剣、毛勝の山脈の白さが見える様になりましたので、十七日頃日帰りで立山出来たら剣でも行こうと思っています。十一月二十日～二十三日は雷鳥次で初スベリ。

言

針葉樹会報の編集に携つていて苦心するの  
は、原稿集めもさることながら、会員消息  
が集められないことである。

寸  
会員数も増え、上下四十年の隔りがあると  
会員には会員の動静に常に気をくばついている  
いうわけにもゆかない。山行のたよりは勿論重  
要だが、会員のコミュニケーションの場として  
の役目も当然果さねばならない。そこで、各種  
通知の返信葉書中にある近況欄である。

事実この記事を一番樂しみによむ会員もいるら  
しい。これからも近況欄には、なんでもよいか  
ら一筆書いて頂いて会報編集に間接的に協力し  
ていただきたいものである——編集子——

住 所 変 更

勤務先変更（名簿訂正も兼ねて）

昭26	横山曉一	小泉三好	小林茂雄	佐野茂雄	根本 太	自 宿	松浦靜雄	榎本直司	勤務先電話	勤務先電話	勤務先電話	勤務先電話	勤務先電話	勤務先電話	勤務先電話	勤務先電話	勤務先電話	勤務先電話	勤務先電話		
昭24	秋元邦夫	間々田良雄	勤務先電話	（九四六）一一一	林 正敏	勤務先電話	（二四一）一二〇六	昭17	勤務先電話	（二一一）〇一一一	昭16	佐野茂雄	自 宿	世田谷区松原二一七一三七	昭14	松浦靜雄	（五三五）二二七一	昭13	望月達夫	（三七〇）三五一	
昭21	勤務先電話	（二一一）〇三一	勤務先電話	（二四一）一一一	昭17	勤務先電話	（二四一）一二〇六	昭17	勤務先電話	（二一一）〇一一一	昭16	佐野茂雄	自 宿	世田谷区松原二一七一三七	昭14	榎本直司	（五三五）二二七一	昭13	望月達夫	（三七〇）三五一	
昭19	瑞穂商事株東京支店	台東区東上野町二一七一四	瑞穂商事株東京支店	（二一一）〇三一	昭19	小林茂雄	勤務先	勤務先	勤務先電話	勤務先電話	昭19	小林茂雄	勤務先	勤務先	昭19	小林茂雄	勤務先	昭19	小林茂雄	勤務先	
自 宿	三鷹市井の頭三一一五	（二一一）〇一一一	勤務先電話	（九四六）一一一	自 宿	三鷹市井の頭三一一五	（二一一）〇一一一	勤務先電話	（九四六）一一一	自 宿	三鷹市井の頭三一一五	（二一一）〇一一一	勤務先	勤務先	昭26	横山曉一	小林茂雄	勤務先	昭24	秋元邦夫	間々田良雄

昭36	昭36	昭36	昭34	昭34	昭34	昭34	昭33	昭33	昭31	昭30	昭28
小林進二	有賀 益	中川誠夫	大橋喜治	城戸 剛	沢木一夫	鈴木博武	萩木俊明	西海隼雄	中村 保	石和田四郎	奥野嶽根
勤務先電話	自 宅	勤務先電話	自宅電話	勤務先電話	自 宅	勤務先電話	勤務先電話	勤務先電話	勤務先電話	自 宅	南 昌汰
(五三五) 四三四六	（九九一）四八五九	（五六二）五一一一	（五六一）一四二一十五	（二七〇）九一一一	（五七二）八五一一	（二七〇）九五一一	（二七〇）九一一一	（二七〇）四一五一	（二七〇）二二七九	練馬区関町五一一九三	笠原正義
勤務先電話	勤務先	勤務先電話	自宅電話	削除	愛知県海部郡弥富町荷之上 があるが丘園地	中野区大和田町四番一九	（六六二）五一一一	（六六二）九一一一	（二七〇）二二七九	（二一ニ）三二一一	（七五一）二一六一

勤務先、自己に移動があ  
下さい。

勤務先、自己に移動があつた時は左記へ御連絡

# 編集後記

今年もあと一ヶ月を残すばかりになつてしまひました。編集子も社会人の端くれになつてはや一年半、その間山に入つていた日数はスキーを含めてもなんとわずか二四日。

「自分の好きな山に、自分の好む登り方で登る」というのが、いちばん自由で、しかもいちげん山登りの本質に触れているようだ。

伊東秀五郎へ北の山へ

日数と回数とは少くとも一つ一つの山行は常に新鮮で充実している。行くたびに新しい驚

きと発見が心の中にわきあがつてくる。時間と暇とをやりくりして山に出掛ける会員の静かに湧き上つてくるような感激がじつと伝つてくる——そういう会報でありたいものだと思ひます。

発行日 40-12-20  
発 行 針葉樹会

針葉樹会報  
12号

連絡先 〒川崎市鹿島田890  
および (株)日立製作所川崎工場 勤務課  
原稿送付先 蟹川隆夫



6. 29. 43.

吉慶行 (Sunday)

6. 05. 14. 23. 41